

バークリ『視覚論』は連合説か？

原 昭

J・J・ギブソンとE・J・ギブソンは、知覚学習の理論、すなわち、我々の知覚がどのようにに発達するかという問題の説明を大きく「豊富説」(enrichment theory)と「分化説」(specificity theory)の二つに分類している⁽¹⁾⁽²⁾。

豊富説は感覚と知覚を、感覚器を通じて送り込まれてくる感覚入力(sensory input)と、最終的な知覚内容(percept)として区別し、前者よりも後者の方が我々をとりまく世界についての情報をより多く含むという前提に立つて、両者の間の差違を、補足(supplementing)、解釈(interpreting)、体制化(organizing)などによって説明しようとする。ギブソン達によれば、すべての知識の起源は経験にあり、現在の経験には過去の経験が混入しているとする経験主義、連合主義の心理学ばかりでなく、連合主義に対する批判として登場したゲシュタルト心理学も、

無秩序な感覚と体制化された知覚との間の不一致の説明をめざす理論として豊富説に分類される⁽²⁾。

一方、ギブソン達の自説である分化説では、知覚内容にあることはすべて刺激入力(stimulus input)の内に含まれており、知覚が豊かになってゆくのは、より多くが弁別されるようになることによるのであって、過去の感覚の記憶や痕跡が付加されることによるのではないとされる。もっとも、知覚の発達が分化によるという考え方が既にゲシュタルト説にも見られることをギブソン達は認めている⁽³⁾。

豊富説が分化説かという分類にしたがえば、G・パークリが一七〇九年に出版した『視覚論』、とりわけ、そこに展開された奥行知覚に関する論考は、豊富説に分類されるべき理論として読まれてきた。具体的には、奥行をはじめとする三次元の空間的性質は、純粋に視覚によってのみ得られる情報のうちには一切含まれておらず、我々が三次元の視覚空間を知覚するようになるのは、触覚を通じて得られる三次元空間に関する情報と、奥行を欠いた二次元的な視覚像とが経験によって連合した結果であるとする理論、すなわち、連合説として理解されてきたと言つてよい。以下の論考においては、しかし、豊富説もしくは連合説による『視覚論』解釈には重大な問題点があることを示したい。

J・S・ミルは、「一般にパークリの理論と呼ばれているが、実際には当代の形而上学者達の公認を受けた学説」⁽⁴⁾を簡潔に、

眼を通じて獲得される情報は二つのものから成り立っている。すなわち、感覚とその感覚からの推論である。感覚は、さまざまに配列された色と、色の変化にすぎない。他はすべて推論、つまり知性の働きであって眼の働きではない。あるいは、普通の言い方に合わせて、その働きを眼に帰するならば、眼がそれを行うのは、本来の能力によってではなく、獲得された能力、つまり、眼が推論、推断能力を用いることで発揮する能力によってである⁽⁵⁾。

と要約している。補足すれば、「視覚は我々に本来は光と色以外には何も伝えない」⁽⁶⁾し、その光と色は「二次元的にしか存在しない」⁽⁷⁾。視覚本来の情報に含まれていないことは、経験に基づいて推論され、判断される。「経験が行つのは、判断の瞬間的な働きを感覚印象に付加する (superadd) ことである」⁽⁸⁾。「視覚の獲得された能力によって見いだされることが、視覚が感覚としての本来の能力によって見るものと等しく直接に知覚されるように思われる」⁽⁹⁾が、それは推論の過程があまりにもすばやく行われることから生じる誤りである⁽¹⁰⁾。

実際、バークリは次のように述べている。

距離はそれ自体直接には見るべきでないということにすべての人が同意すると私は思う。というのも、距離は眼に向かつて真つ直ぐに引かれた線であるから、眼底に一点しか投影せず、この点は、距離が長くて短くても、常に同じままであるから⁽¹¹⁾。

……、視覚(vision)を正確にかつ混乱なく論じるためには、眼が感知(apprehend)する対象には二種類あり、一方は第一次的に直接的に、他方は、前者の仲介によって第二次的に感知されるということを心に留めておかねばならない。第一種の対象は、心の外、すなわち、距離をおいて離れたところにはなく、また、あるようにも見えない。たしかに、それらは大きくなったり小さくなったり、ぼやけたりはつきりしたり、かすんだりはするが、それらが我々に近づいたり我々から遠ざかったりすることはないし不可能である。ある対象が距離をおいてあるとか、それが近づいてくる、あるいはより遠くへ離れてゆくと我々が言う時はいつも、我々は後の種類の対象を意味しているにちがいない。そして、それは本来触覚に属していて、正しくは眼に知覚されるというよりもむしろ、耳に思考内容が示唆(suggest)されるのに似た方式で、眼に示唆されるのである(50)。

我々が目を開けば必ずそれら「視覚対象」によつて、距離、物体、触覚上の形(tangible figures)の観念が示唆される。視覚の観念から触覚の観念への移行(transition)が非常に素早く、不意で、知覚されないため、それらが等しく視覚の直接対象であると考えずにはまいられないのである(145, I「内論者」)。

第50節で言われる、第一種の対象(『視覚論』では「視覚の直接対象」(immediate object of sight)「視覚に固有な対象」(proper object of sight)あるいは単に「視覚対象」(visible object)「視覚の観念」(idea of sight)と呼

ばれる）は光と色 (light and colours) ⁽¹⁷⁾ にすぎなく (77, 103, 129, 130, 156, 158)。

バークリが、視覚対象は光と色にすぎないと言ったとき、二つのことが含意されている。一つは、引用にもあるように、光と色という視覚対象が心の中にのみ存在するということである(77, 111, 119)。もう一つは、視覚と視覚以外の感覚『視覚論』で問題にされるのは主に触覚であるが)との間には共通の観念が一切ないということである(127, 129)。

いわゆる「表象説」では、外界に存在する同一の事物について得た観念は、視覚と触覚のように異なる感覚を通じて得られたにせよ、共通の原因を持つことになる。色は第二次性質の観念であり、それを知覚する主体を離れて、つまり、心の外に独立に存在することはない(cf. 63)。しかし、視覚を通じては、見えている事物の、数、形、大きさ、運動といった第一次性質の観念も得られ、これらの観念は、同一の事物について触覚を通じて得られる観念と共通であるとされる(cf. 130)。バークリは、このような表象説に立った場合の見方を、「ある物体の延長や形は、二つの道から、それも視覚と触覚のどちらによるかの別なく心に入ってくるので、我々は自分たちが触れるのと同じ延長、同じ形を見ていることになると思われる」(48)と言い表している。

これに対して、バークリ自身は、「視覚によって知覚される延長、形、運動は、同じ名前で呼ばれる触覚の観念とは種的に異なり、両方の感覚に共通な観念、あるいは共通な種類の観念というようなものもひとつもない」(127, cf. TVW, sect. 44) ⁽¹²⁾ と主張する。これは、視覚の観念と触覚の観念に共通の外的(物質的)原因はないということであり、「同じ事物が視覚と触覚の両方に作用すると考えるのは誤りである」(136)ということになる。

第50節は、このように「種的に異なる」二つの観念のうち、触覚の観念はその原因を心の外に、すなわち、距離をおいたところに持つと述べており、触覚についてはパークリも表象説にしたがっている（cf. 45, 55, *PHK*, sect. 44）⁽³⁷⁾。一方、視覚の観念が心の外には存在しないという点は、表象説での第二次性質と同じであるが、外界にある対象、つまり触覚対象が視覚の観念の原因であることは否定され、「視覚の直接対象は、離れたところにおかれた事物の観念でもなければ類似物でもない」（44）ことになる。このことから、『原理論』での全面的な「非物質論」の展開に先立ち、パークリは『視覚論』で「視覚の非物質論」を示したと言われる⁽¹⁴⁾。

視覚と触覚がお互いに共通する対象を持たないということから、視覚対象は不可触であり（95, 129, 135）、触覚対象は不可視ということになる。パークリの言葉では、

正しくかつ厳密な言い方では、私は距離それ自体も、また、離れたところにあると私が思っているようなものも何も見ていないのである。つまり、距離も離れたところに置かれた事物も、それら自体あるいはそれらの観念も正しくは視覚によつては知覚されていない（45）。

のであり、「空間（space）、外在性（outness）、離れて置かれた事物の諸観念は、厳密に言えば、視覚の対象ではない」（46）のである。また、距離ばかりではなく、外的な事物の大きさや（64）、我々が踏みしめている大地さえも（cf. 113）直接に見ることはできない。

しかし、こうした視覚によつては直接知覚できない触覚対象の距離、大きさ、位置は視覚の観念の媒介によつ

て (by mediation of visible ideas) つまり間接的に知覚される (11, 121) ⁽²⁷⁾。視覚の直接対象を介して、視覚にとつては間接的な対象である触覚対象を知覚するということをも、バークリは別の言い方で、前者が後者を心に示唆 (suggest) する (45, 50, 53, 54, 57, 73, 74, 103, 130, 135, 138, 142, 144, 145, 147, 152)。

既に触れた「視覚の非物質論」によつて「視覚の因果説」とも言つべき関係は否定され、触覚対象と視覚対象との間に物理的・必然的な関係は存在しない。バークリは、視覚対象が触覚対象を示唆するようになるのは全く、両者が共に存在するのを経験することによつて生まれる習慣的な結びつきの結果であり、必然的な関係によるのではないことを強調する (21, 28, 99, 103, 104, 105, 107, 108, cf. 25)。「いつした視覚対象はすべて心の中にのみあり、言葉が事物を示唆するような習慣的結合による以外には、距離であれ大きさであれ何ら外的なものを示唆することもないのである」(77)。

バークリは、視覚対象と触覚対象との間の習慣的関係を、記号とそれが指示する事物あるいは言葉とその意味との関係になぞらえる。

それら「視覚に固有な対象」が離れたところにある対象を意味し、我々に示す方式は、言語や人間が決めた記号の方式と同じである。というのも、言語や記号は、それらが意味する事物を本性上の類似性や同一性によつて示唆するのではなく、経験によつて我々が記号と意味の間に観察してきた習慣的な結合によつてのみ示唆するからである (147, [「内論者」])。

したがって、モリヌー問題（132）⁽¹⁵⁾が想定する人物、すなわち、目が不自由なまま育った後に開眼手術を受けて新たに視覚を獲得した者が初めてものを見る時点では、視覚対象と触覚対象との結びつきをまだ学んでいないので、「最初、視覚によつては距離の観念を持たないであろう。太陽や星々という最も遠い事物も、もっと近くにある事物と同様に、すべてが自分の眼の中、というより、自分の心の中にあるように思われるだろう」⁽⁴¹⁾し、「自分が見たものどれも高いか低い、正立しているか倒立しているかと考えることはないだろう」⁽⁹⁵⁾ということになる。さらに、彼は視覚対象から触覚対象の大きさも形も数も知ることはない（104, 105, 108）。それどころか、彼が視力を回復した当初は視覚対象が未分化の状態、あれこれ具体的な事物を認識することも（110）、対象の運動の方向を言つことさえできない（137）。

ここまでのところでは、『視覚論』を「我々による『空間』の観察は、まったく視覚的ではなく、我々の過去の経験の間に視覚刺激と連合した運動感覚的な記憶像から成り立つ」⁽¹⁷⁾という議論のひとつとみなすのが自然であり、そこから、経験主義的な心理学という流れ（その一つの頂点が、奥行知覚は奥行のない色の感覚（depthless sensation of color）が与える手がかり（clue）を解釈することによつて得られるという、ヘルムホルツによる無意識的推論の理論であると言われる）⁽¹⁸⁾の源流にパークリ『視覚論』を位置づけたくなるのももつとも思われる。

連合説による『視覚論』解釈では、 距離〓奥行 と 二次元の視覚像＋距離〓三次元の視覚像 という二つ

の図式が想定されているように思われる。距離＝奥行 は、触覚対象の距離と視覚的な奥行とを区別せず同一視することである。二次元の視覚像＋距離＝三次元の視覚像 という足し算の方は、奥行を欠く二次元の平面的な視覚像に、触覚を通じて経験された第三の次元である距離の観念が付加されることによって、我々が現に目にしている、奥行を含んだ三次元の視覚空間が見えるようになることである。これらの想定に立てば、前章で引いた『視覚論』第2節にある「距離はそれ自体直接には見ることができない」が、視覚の直接対象は奥行という第三次元を欠いた二次元の平面的な視覚像であるという意味になる。

D・M・アームストロングは、今触れた、「距離はそれ自体直接には見ることができない」⁽²⁾という主張にこそ『視覚論』の全議論が基づくと言い⁽²⁵⁾、「直接に見られるものは二次元の空間的な場 (two-dimensional spatial field)、すなわち『光と色』が二次元的に配列され、『平面像』と呼ばれることもあるものを構成する」⁽²⁶⁾と述べている。さらに、「もし我々が視界 (field of view) から、いわば、『奥行を取り去る』 (remove depth) ならば、我々には二次元の視覚の直接対象が残されるのは明白に思われる」⁽²⁷⁾としている。また、G・ピッチャーも、「視覚的な現れ (visual appearances) に第三次元が欠如しているということからは、視覚的な現れが全くの二次元であるということが帰結する」⁽²⁸⁾と述べている。これらの論者がこのように、三次元の視覚像 距離＝二次元の視覚像 という引き算が可能であると考えるのは、先の二つの想定に立って『視覚論』第2節を理解しているからである。

たしかに、バークリは、距離を見ることはできない⁽²⁾と言い、視覚の直接対象は距離を離れたところにあるようには見えない⁽⁵⁰⁾と言つ一方で、距離以外の、事物の大きさや形などの延長や運動は視覚と触覚のいず

れにも備わっているように語っている（54, 55, 104, 105, 121, 133, 137, 139, 140-3, 152）。つまり、視覚の直接対象には距離という第三の次元だけが欠けているように見えるのである⁽²³⁾。

しかし、アームストロング自身も注意するように、パークリは視覚対象が二次元であるとはつきりは言っていない⁽²⁴⁾。それどころか、パークリは、立体（三次元）の観念が平面（二次元）の観念に先立つことを認めて、「幾何学的平面の観念を形作るためには何らかの距離の観念が必要である」（155）と言つて、そして、

言っておかねばならないのは、人々が、立体（solids）が視覚の直接対象ではないと認めておきながら、平面つまり平らな形（flat or plain figures）は視覚の直接対象だと考えたくなることである（157）⁽²⁵⁾。

……平面は立体同様に視覚の直接対象ではない。厳密な意味で我々が見るのは立体ではないし、さまざまに彩られた（variously coloured）平面でもない（158）。

とも述べている。アームストロングは、自分自身が視覚の直接対象であると理解している「二次元的な多様体」（two-dimensional manifold）と、パークリが否定している「平面」とは似ているが異なるものであり、この区別をしっかりとつけておけば解釈上の問題は生じないとしている⁽²⁶⁾。

しかし、ことはこれだけではすまない。パークリの論述の仕方には注意が必要なのである。たしかに、既に触れたように、例のモリヌー問題の主人公のような人物が最初から視覚によって距離の観念を持つことは不可能で

あると言つとき(4)には、距離の知覚だけを問題にして、見えている事物の形などは識別可能でそれが何であるか認識できることを否定してはいないかのように見える。また、距離だけではなく大きさも視覚の直接対象ではない(93)ので、新たに開眼した人物には、事物の大きさについても、晴眼者と同じような判断をすることはできないと言つときも、塔、親指、空などの対象は識別できるかのように語っている(79)。ところが、議論が進むと、このような人物の場合、目の前に別の人が立つていても、最初はその頭や足という身体の部位さえ識別できないといふことになる(110)。そしてついに、

視覚機能(visive faculty)によつて本来知覚されるもののすべては、さまざまな割合の光と陰を伴い変化する色ではない。けれども、こつした視覚の直接対象は、絶え間なく変化し移ろつてゆくので、幾何学的な図形のような方式で扱うことはできないし、そのように扱つても少しも役に立たない(156)。

と言われる。結局、視覚の直接対象は「光と色の混沌」とも呼ばれるべきものであつて、二次元でさえもないのである。

もちろん、視覚対象が二次元の視覚像であることが否定されたからといって、連合説による『視覚論』解釈が否定されたことにはならない。というのも、この段階では、「光と色の混沌」が触覚対象の形や大きさ、位置関係や距離と連合することによって、視覚観念に付加され、視覚を通じて知覚されるようになると言つこともできるからである。しかし、次に示すように、さらに深刻な問題が連合説による解釈にはある。

既に触れたように、パークリは視覚と触覚に共通な観念があることを否定している(127, 129)。視触共通観念の否定は、視覚を通じて第一次性質の観念が心に持ち込まれるという表象説の否定であつた(130)。「視覚によつて、光と色とその変化だけでなく、なにかそれより多くのものが知覚される」(ibid.)という考え方の例として、J・ロックが視覚を「我々が持つすべての感覚のうちで最も包括的であり、光と色というこの感覚にのみ特有な観念を心に持ち込む。そして、空間、形、運動というはるかに異なる観念もまた持ち込む」、『人間知性論』第2巻、第9章、第9節)と述べているのをパークリは引いている(130)。ロックに反対して、パークリは、視覚を通じて視覚以外の観念が入ってくると言つのは、一切の色を含まない抽象的な形や延長を思い描くことができるとうに等しいとしている(ibid.)。つまり、表象説が想定する通りに、「我々は自分たちが触れるのと同じ延長、同じ形を見ている」(48)のであれば、視覚対象から一切の色を排除してもなお、視覚的ではない延長や形が残らなければならないというのがこの点に関するパークリの主張であると考えられる。

この、パークリが表象説を破壊するために提出した視触共通観念の否定と、連合説による『視覚論』解釈とが抵触するのである。先の二つの想定(前章)にしたがえば、視覚上の奥行と触覚上の距離とは共通であり、距離が視覚対象に付加されることにより奥行が見えるようになる。つまり、触覚上の距離が視覚対象に含まれていることになる。

また、表象説にせよ、連合説による解釈にせよ、視覚対象に含まれる触覚の観念が見えるというのは、視覚の

観念中に触覚の観念が、いわば「提示」されているのであって、『視覚論』の言う、触覚の観念が視覚の観念によって「示唆」されることにはならない。というのも、以下に説明を試みるように、「XがYを示唆する」とバークリが言う場合、XとYとの間に共通なものは含まれないからである。

バークリが視覚の機能と言語の意味作用との間にアナロジーを認めていることには既に触れた。実際、視覚のモデルとして言語がしばしば持ち出され（17, 20, 32, 51, 64, 73, 77, 144, 147）『視覚論』の結論も、「視覚に固有の対象は自然の造物主（the Author of nature）の普遍言語を構成する」（147）というものである。音声であれ文字であれ、言語が記号として有意味であるために、その意味・指示対象を（文字通りの意味で）含んでいる必要はなく、前者と後者の間になにか共通な要素が必要なわけでもない。「赤」という言葉が赤い必要は全くない。

言語以外にも、バークリは、他人の感情がその人の顔色を記号として知られる場合を例に挙げて視覚を説明する。

我々は、距離を見るようにして大きさも見る。そして、我々はその両方を、我々が人の姿に羞恥心や怒りを見るのと同じ方式で見る。それらの感情自体は不可視である。それにもかかわらず、それらは顔色や表情の変化とともに眼によって取り入れられる（65）。

この「視覚の感情モデル」とも呼ぶべき例でも、恥ずかしさで赤面したときの顔の色が羞恥心を意味するのに、後者が前者に含まれたりしない（cf. 9, 10, 23）。このように、言語と感情という二つのモデルは、「XがYを示

唆する」あるいは「YがXを通じて（間接的に）知覚される」という場合には、XがYを含んではないことを示す。

さらに、家の中にいて外を通る馬車の音を聞く場合を例に、視覚と聴覚とを比較してパークリは、

音 (noise) の変化によって私は馬車のさまざまな距離を知覚し、表を見るよりも前に、それが近づいてくることが判る。このようにして私は、眼によって距離を知覚するのとちょうど同じ方式で耳によって距離を知覚するのである（46）。

と言つ。しかし、これに続く節では、

にもかかわらず、私は距離を聞く、と言つのと、私は距離を見る、と言つのは似た言い方ではない。というのも、視覚の觀念が触覚の觀念と混同され易いほどには、聴覚によって知覚される觀念と触覚の觀念とは混同され易くないからである。それゆえ、人は同じようにして、物体や外的な事物 (bodies and external things) が聴覚に固有の対象ではなく、音だけがそうであり、これを媒介にしてあれこれの物体、距離が自分の思考に対して示唆されるということには容易に納得するのである（47）。

と注意している。触覚の觀念を示唆する方式は視覚、聴覚どちらでも同じであるが、聴覚に固有な觀念である音

に触覚の觀念が含まれていないことは容易に納得されるのに、視覚の觀念に触覚の觀念が含まれていないことを納得するのは難しいということである。もしも、視覚の觀念が触覚対象を示唆するに際して、前者に後者の觀念が含まれているのであれば、触覚の対象を含まない聴覚の觀念によって触覚対象が示唆される聴覚と方式が同じであるとは言えなくなる。

このように、視覚と触覚に共通な觀念の存在が否定されていることから、また、「示唆」という語の用法からも、視覚対象はなんらの触覚の觀念も含まないことが示される。そして、この点を認めるならば、奥行を欠いた二次元の視覚像が触覚に属する距離を含むようになることでもしくは、触覚の觀念を一切含まぬがゆえに光と色の混沌でしかない視覚対象が、さまざまな触覚の觀念を含むようになって二次元の視覚像が生まれるという連合説による『視覚論』解釈を採ることはもはやできない。

前章までの議論によって、バークリの視覚理論を連合説として理解することには大きな困難があることを示すことができたと思われる。しかし、これに対して次のような問題が指摘されるかも知れない。つまり、連合説による『視覚論』解釈において想定されていると思われる二つの図式のうち、二次元の視覚像＋距離＝三次元の視覚像の方は、それを光と色の混沌＋触覚の觀念＝三次元の視覚像と修正しても成り立たないであろうが、もう一方の距離＝奥行については、まだその可能性が完全には否定されていないのではないかという反論で

ある。というのも、パークリ自身は「触覚上の距離を示唆する視覚上の奥行がある」と、はっきりは言っていないので、触覚上の距離が視覚上の奥行として視覚像中に現れるという連合説からは離れても、「距離はそれ自体直接には見ることができない」(26)と言われる場合の「距離」という語が触覚上の距離だけでなく視覚上の奥行をも指しているという解釈が可能だからである。言い換えると、理由は何であれ、パークリが距離についてだけは、視覚上の距離、触覚上の距離という区別を設けていない可能性が残っているのではないかということである。もちろん、この場合、視覚対象が奥行を含むことは否定され、我々が現に見ている(と思っている)奥行は幻覚の類になってしまう。この問題には次のように答えることにしたい。

まず、問題の第2節に述べられている「距離」、すなわち、「眼に向かって真っ直ぐに引かれた線」が触覚対象であることは、それこそ『視覚論』のすべての読者が同意するであろう。この節は、細かな異同をのぞけば、ほぼそのままモリヌーの『新屈折光学』にあることが知られているが⁽²⁷⁾、モリヌー自身はこのような線を「物質的な線」(material line)と呼んでいる⁽²⁸⁾。また、『視覚論』においても、これが、幾何光学でいう視軸(optic axis)や(視覚対象ではなく外部から眼に送られてくる)光の経路に重なることが読みとれる。

既に触れたように、パークリは、三次元の知覚が二次元の知覚に先立つことを認めている(155)。さらに、

我々は立体を見るのと同じ方式で平面を見るのである。というのも、両者は等しく視覚の直接対象によって示唆され、そして、それに応じて視覚の直接対象それ自体が平面や立体と呼ばれるのである(158)。

とも述べている。「平面」「立体」と呼ばれる視覚対象があり、同じ名前の視覚対象を示唆するといっているのであれば、視覚上の「距離」を示唆する同じ名前の視覚上の「距離」すなわち「奥行」があつてよいはずである。混乱がなにもつに注意しなくても、連合説の図式「距離＝奥行」は、視覚対象としての距離と視覚対象としての奥行を同一視するにあつた。「たゞ」にて明らかにもつてゐるのは、『視覚論』中に「視覚上の「距離」とは別個に「視覚上の「距離」があつて、後者が前者を示唆するものになつてゐるからである。もし、そのであれば、視覚距離＝視覚距離、視覚距離＝奥行」となり、バークーリが第2節で直接に見ることのできないう言つのは視覚距離の方であつて、奥行が直接に見えることは否定されてゐないことになる。

新たに開眼した人物が見えるものになつてすべてに視覚対象の正立・倒立を判断できるかといふ問題を論じている部分で、バークーリは、

どんな視覚対象であれ、それが高いとか低いとか言つのは、それが視覚上の地面から多く離れてゐるから、どんな視覚対象であれ、それが視覚上の地面から多く離れてゐるかに依つてである。そして、同様にして、どんな視覚対象であれ、それが視覚上の地面からより多く離れてゐるから少なく離れてゐるかの割合に応じて、それを高いあるいは低いと呼んでゐる。(III)

……なんであれ二点間の距離といつてで意味されてゐるのは中間にある点の数だけである。与えられた点か視覚上のものであれば、それらの間の距離は中間にある視覚上の点の数で表される。点か視覚上のものであれば、それらの間の距離は視覚上の点からなる線である(112)。

と述べている。ここに示された、地面からの距離や二点間の距離が、第2節にある、眼に向かつて真つ直ぐに引かれていたために、たとえ見えたとしても一点にしか見えない触覚上の距離と異なることは明らかである。さらに、

視覚と触覚という二つの別個の領域は別々に、それも、距離や位置という点では、視覚対象と触覚対象がお互いにいかなる交渉もいかなる類の関係も持たないかのように考察されるべきである（115）。

と言われていることから、触覚上の形や延長を示唆する視覚上の形や延長があるのと同様に、触覚上の距離を示唆する視覚上の距離、すなわち、視覚の直接対象としての奥行があると考えると問題はないと思われる。そして、問題の第2節が否定しているのは、やはり、触覚上の距離が直接に見えることであつて、視覚上の距離である奥行が見えることを否定しているのではないと考えるべきである。

既に、連合説による『視覚論』解釈がもつ問題点を指摘するという本論稿の目的を達することはできたと思われるが、もう一つ簡単に触れておきたい問題がある。それは連合説によらない『視覚論』解釈の可能性である。

元々は、「光と色の混沌」(156)でしかない視覚対象が、どのようにして、触覚対象とは別種、別個な、形、大きさ、組合せを持ち(49, 102, 110, 111, 127, 137)、対応する触覚対象と同じ名前で呼ばれる(49, 55, 121, 127)ようになり、ついには、「非常に多様ではあるが、相互に十分分離していて判明な視覚対象を同時に知覚することができる」(145)に至るのか、が今度の問題である。

先にも触れた、開眼したばかりの人物が目の前に立つ他の人を見たとき、後者が正立しているか倒立しているかの判断が前者につくかどうかという、モリヌー問題と同様の思考実験を議論するなかで、パークリは、この人物が

……はじめて視覚をはたかせたときに、視覚の観念を他の人々がするのと同じような別個な集まりに括り出す(parcel out)じつはないだろう。というのも、他の人々はどれとどれが通常は共在(coexist)していつ、一つの名前のもとに一緒に束ねられる(bundle up)のがふさわしいかを経験してきたからである。……彼の心には、見えている人間を構成する観念が、同時に知覚される他の視覚の観念すべてと共に押し入ってくる。しかし、彼が自分の視界に一度に提示されたこれらすべての観念を種々別個の組合せへと振り分ける(distinguish)ようになるのは、その人間の部位が動くのを観察することやその他の経験によって、どれとどれが分けられるべきであり、どれとどれと一緒に集められる(collect together)べきであるかを知るようになるそういう時が来てからである(110)。

と述べている。ここには、最初はカオスであった視覚の観念が分節化し体制化することによってコスモスとしての視覚像へと変化し始めることが示されている。こうした分節化と体制化に平行して、視覚対象と触覚対象との共在が両方の感覚を通じて知覚されるという経験から、両者の間の対応関係が学習され、やがては、視覚対象が触覚対象の記号となり、前者が後者を示唆することによって、手の届かないところにある触覚対象についても視覚によって知ることができるようになるというのが、『視覚論』における知覚学習のシナリオであると思われる。

このシナリオに基づく『視覚論』解釈（仮に「分節化と体制化による解釈」と呼ぶことにする）を、ゲシュタルト説⁽²⁸⁾やギブソン達の分化(differentiation)の理論との関連をも含めて、心理学説として論ずることは、本論稿の議論の範囲と論者の能力を超えている⁽³⁰⁾。ただ、「分節化と体制化による解釈」が、視触共通観念の否定と抵触することがないことを指摘しておきたい。

註

パークリのテキストには『*The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, 9 vols., ed. A. A. Luce and T. E. Jessop (Edinburgh: Thomas Nelson and Sons, 1948-57) (以下『*Works*と略記)』を用いる。

パークリ『視覚論』Berkeley, George. *An Essay Towards a New Theory of Vision* (1709) (*Works*, vol. 1, 1948) (下條信輔他訳『視覚新論』勁草書房、一九九〇年)からの引用および参照箇所の手指示は節番号によっておこなう。『視覚論』以外のパークリの著作については以下の略記を用いる。

PHK: *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*, Part I (1710) (*Works*, vol. 2, 1949) (大槻春彦訳『人知原理論』岩波文庫、一九五八年)

TVV: *Theory of Vision Vindicated and Explained* (1733) (*Works*, vol. 1, 1948) (『視覚論弁明』前掲『視覚新論』所収)

- (1) James J. Gibson and Eleanor J. Gibson, "Perceptual Learning: Differentiation or Enrichment?" *Psychological Review* 62, no.1 (1953): pp. 32-41.
- (2) Ibid., p. 33.
- (3) Ibid., p. 34.
- (4) John Stuart Mill, "Bailey on Berkeley's Theory of Vision," London: *Westminster Review*, 38 (1842), p. 320. Rpt. in *Berkeley on Vision: A Nineteenth-Century Debate*, ed. by George Pitcher, New York: Garland, 1989.
- (5) Ibid., p. 322.
- (6) Ibid., p. 320.
- (7) Ibid.
- (8) Ibid., p. 328.
- (9) Ibid., p. 320.
- (10) Ibid., p. 321.
- (11) パークリの言う視覚対象としての「光」は、視覚の原因としての光のことではないから「明るさ」と訳すべきかも知れない。
- (12) 原文はすべてイタリック。
- (13) 『視覚論』において「心の外にある」(being without the mind) と「距離を隔っている」(being at a distance) とが同義(41, 43, 50, 55, 95) である。
- (14) Colin Murray Turbayne, "Berkeley and Molynieux on Retinal Images," *Journal of the History of Ideas* 16 (1955), p. 340.
- (15) ただし、眼前の極く近い距離にある事物については、その距離を伝える媒介となる観念と「眼球の回転の感覚」(16) や「目の緊張の感覚」(27) とについて視覚以外の観念が挙げられる。
- (16) Locke, John. *An Essay concerning Human Understanding*, ed. P. H. Niddich (Oxford: Clarendon Press, 1975), Bk. 2, ch. 9, sect. 8. (大槻春彦訳『人間知性論』岩波文庫、一九七一年、七十七年)
- (17) Hochberg, J. E. *Perception* (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1964), p. 39f. (田中良久訳『知覚』岩波書店、一九六六年)。

ホッホバークはまた、「我々はどこから、空間、大きさ、立体性(solidity)などの観念を得るのだろうか。唯一そのような源としてありうるのは過去の経験の記憶であるというのが、パークリの今や伝統的な仮説である」(ibid., p. 42)とも述べている。

- (18) Gibson and Gibson, p. 32f.
- (19) Armstrong, D. M., *Berkeley's Theory of Vision: A Critical Examination of Bishop Berkeley's Essay towards A New Theory of Vision* (Melbourne: Melbourne University Press, 1960; New York: Garland, 1988), p. 2.
- (20) Ibid., p. 5.
- (21) Ibid.
- (22) Pitcher, G., *Berkeley* (London: Routledge & Keagan Paul, 1977), p. 8.
- (23) Colin Murray Turbayne, *The Myth of Metaphor*, Rev. ed. (Columbia, S. C.: University of South Carolina Press, 1971), p. 128.
- (24) Armstrong, p. 5.
- (25) cf. Locke, ibid.
- (26) Armstrong, p. 6.
- (27) Molyneux, William, *Dioptrica Nova* (London: 1692), p. 113. cf. *Works*, vol. 1, p. 171, n. 2.
- (28) Molyneux, *Admonition to the Reader, Dioptrica Nova*.
- (29) 論者は『視覚論』をナシタルト説のちうじつ(X suggest Y to Z)と図式をZ perceive X as Yとじつ図式に置き換えて)読むという試みをおこなったことがある。拙論“God Speaks to Us in the Same Divine Language,”(『哲学会報』第14号、学習院大学哲学会、一九九〇年、(一)(11))。
- (30) 『視覚論』の心理学説史的位置づけについては、邦訳『視覚新論』(前掲)の訳者の一人である下條信輔氏による「解説パークリと現代の視知覚理論」(『視覚新論』pp. 225-275)が詳しい。この「解説」は、経験連合説、神経学的コネクショニズム、感覚知覚段階説、知覚表象説などの理論にみられる『視覚論』の影響、類縁性を明らかにするとともに、『視覚論』の心理学的な展開と哲学的な側面との不整合にも注意しており、本論稿の執筆にあたっても、『パークリの究極的な目標は、触覚も含めた現象(観念)一元論にあり、知覚の対象表象図式を否定することにあつたといわれている』(p. 255)にも関わらず、『生理学や「生理学的因果論」に基づく心理学説が、パークリの原理をそれなりに踏襲しつつも、対象表象図

バークリ『視覚論』は連合説か？（原）

式に一方的に加担するといふ、いびつな結果になったのはどうしてか」(p.237)という問いや、
感覚素材 + 経験に基づ
く知識・意味・推論・判断 = 知覚 (p.237)という図式などの点で刺激を受けた。

（哲学科 非常勤講師）

バークリ『視覚論』は連合説か？（原）